

2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/30

| 団体名 | 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 | 活動タイトル | 学齢期の外国にルーツがある子どもたちのための居場所づくり事業 | | | | |
|--|---|--|---|---|--|---|-----------------|
| <p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p> | | | <p align="center">■ 活動風景</p> | | | | |
| <p>● 望ましい社会状況（ビジョン）</p> | <p>当会の実現したいビジョンは、外国ルーツの子どもたちが、自らの権利を享受し、社会的責任を果たし、地域コミュニティにおいて共生が実現した社会である。外国ルーツの子どもたちが、自らの言語・文化・アイデンティティ・信仰の自由に関する権利を享受し、自己実現が妨げられずに成長できる社会の中で、地域住民との相互理解と共に暮らすことを実現し、および当会の理念である人間の尊厳と多様性を尊び、「共に生き、共に学ぶ」ことができる平和な社会を目指す。</p> | | <p align="center">オンラインでの居場所づくり活動の様子（集合写真）</p> |  | | | |
| <p>● 団体の社会的役割（ミッション）</p> | <p>当会のミッションは、対象地域の外国ルーツの子どもたちが、地域社会の中で暮らすために必要な知識や情報にアクセスでき、他者との関わりの中で自己の存在や役割を見出すことができる、健全育成の取り組みを行うことである。具体的には、以下の取り組みを推進する。</p> <p>1)外国ルーツの子どもが安心して自分らしくいられる居場所活動を継続して実施する。 2)新型コロナウイルス流行により他者との関わりが薄れる中で、対面・オンラインを交えた柔軟な取り組みを行い、感染防止と孤立防止を両立させる。</p> | | | | | | |
| <p>● 団体の活動基盤</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・活動を直接担う居場所運営スタッフ、多言語に対応可能な通訳スタッフが複数名継続して在籍し、活動を担える人材として育成される。 ・自治体などの施設を柔軟に活用できる。 ・自主財源と活動に対する助成金を継続的かつバランスよく確保し、スタッフ人件費や会場費など、継続の必要がある経費を、安定して支出できる。また、事務所機能を担うための財源が確保できる。 ・行政や支援団体と連携し、支援活動と繋がりのない家庭の子どもについての情報を得られること。多文化共生関連のネットワークからの関連情報を得られること。 | | | | | | |
| <p align="center">■ 活動報告</p> | | | <p align="center">■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p> | | | | |
| <p>● 居場所づくり活動 大学生・大学院生がスタッフとして、企画と進行を担い、外国ルーツの子ども向けの「居場所」をオンラインで開催した。通訳を配置し、日本語にとらわれず、自分らしく他者と交流できる場を継続することができた。</p> <p>● 進路相談会 進路決定に際し、知識の不足、言語の壁、親の知識・理解など、より多くの課題を抱える外国ルーツの子どもが、同じルーツを持つ高校生・大学生の話聞き、相談できる機会を設けることで、自らの進路について考えることができる機会を設定した。 居場所づくり活動にも共通するが、ロールモデルに乏しい外国ルーツの子どもにとって、同じルーツを持つ年長者と交流することにより、将来像の構築を図っている。</p> <p>● フィールドワーク コロナの感染状況が流動的で、ほとんどが計画のみで実施に至らなかったが、2021年末には東京都美術館のイベントに参加した。</p> <p>● 研修・ボランティア 単発の研修ではなく、新旧のスタッフが個別にサポートし合える形をとった。</p> | <p>● 居場所づくり活動 ①49回開催、のべ399人が参加 ②参加者向けアンケートにおいて、回答者の75%が、活動を「とても楽しい」「楽しい」と答えた。その理由は、「色々な話ができる」「みんなと一緒に話せる」といったものであり、参加者の多くが活動により安心を得られていると言える。</p> <p>● 進路相談会 ①2回開催、延べ21人が参加 ②回答者の50%が、「出てよかったイベント」として「進路相談会」を上げている。理由として、受験生意識が芽生えたことを挙げている。</p> <p>● フィールドワーク ①1回開催②単発のアンケートは実施しなかったが、回答者の25%が出てよかったイベントとしている。</p> <p>● 研修・ボランティア ①ボランティアサポートイベント2回、引継ぎ会議3回実施、ボランティア参加のべ91人 ②活動を自立運営できるスタッフ6名（内2名は、通訳スタッフから運営・通訳スタッフへと、業務を掛け持ちできるようになった）</p> | <p align="center">スタッフミーティングの様子（社会的なテーマを紹介するコーナー）</p> |  | | | | |
| <p align="center">■ 事業を通じて得られたノウハウ</p> | | | <p align="center">■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p> | | <p align="center">■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p> | | |
| <p>新型コロナウイルスの断続的な流行により、オンラインでの居場所づくりを行った。これまでにない試みであったが、自宅からの参加が可能であること、また画面越しでの距離感により、子どもが気軽に参加できること、性別や年齢の違いがあっても比較的スムーズに交流できることが分かった。一方、実際に集まれば、自然と会話や遊びが生まれ「居場所」になるが、オンラインではプログラムを用意し、ファシリテーターとしての役割が不可欠であることが分かった。アンケート実施においては、「聞かれたくない」「楽しくない」といった子どもから抵抗が大きく、1度にまとめた実施に留めた。そのため、今後の評価の際には、子どもの負担が少ない調査方法を検討したい。 進路相談会においては、外国ルーツの子ども向けの進学に対する知識を向上させるほか、同じルーツの年長者と相談できる機会の重要性が感じられた。ボランティアには、学生を中心に一定の参加があったが、継続参加、主体的な活動サポートには課題が残る。「ボランティア参加により得られるもの」をアピールしていく必要がある。</p> | | | <p>多様化する日本社会において、「共に生き、共に学ぶ」ことができる多文化共生社会を目指し、外国ルーツの子どもに向けて、「居場所づくり」「進路相談会」「フィールドワーク」「スタッフ・ボランティア育成」を行った。 「居場所づくり」では、参加者が想定より伸びなかった。オンラインの特性を生かして全国展開するか、あくまで地域の活動の延長線上として行うかは、今後方向性を定める必要がある。「ボランティア育成」については、継続して主体的に活動を担うボランティア確保の必要性を痛感した。ボランティア参加者にとっても居場所として機能できると、課題を解決できると思う。また、活動全体において、スタッフと参加者という縦の交流は盛んだが、参加者同士という横の交流、地域との交流が乏しかった。横の交流によって互いの理解を促進させる必要がある。 また、海外と様々なつながりを持つ国際協力NGOとして、団体のこれまでの知見・経験を生かしていくと、より効果的だと考えられる。</p> | | <p>この1年間の活動を通じて</p> | <p>49回の居場所活動実施とのべ399人の参加、また7人のスタッフ育成とのべ91人のボランティア参加</p> | <p>を達成しました。</p> |
| <p align="center">■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p> | | | <p>「学校では静かだけど、ここではおしゃべりと言われる」という発言 →積極性・自主性の向上 「土曜日にクロスルーツ(オンライン居場所)があるから好き。」という発言 →受益者にとって居場所としての役割が向上。</p> | | | | |